



レジャー白書 2012

～震災後の余暇を考える～
公益財団法人 日本生産性本部

公益財団法人日本生産性本部（理事長 松川昌義）余暇創研は、『レジャー白書 2012 ～震災後の余暇を考える～』をとりまとめた。同白書は、全国15～79歳3,294人対象の余暇活動実態調査結果等をもとに、わが国における余暇の実態を需給双方の視点から総合的・時系列的にとりまとめている唯一のもので、1977年の創刊以来通算36号目になる。

特別レポート ～震災後の余暇を考える～ <⇒別添資料 p. 4、p. 5>

※東日本では、「震災後、余暇活動が減った」とする回答がその他の道府県の2倍近くにのぼった。「岩手県・宮城県・福島県」では、「現在も減ったまま」とする回答が多い(27.8%)。一方、東日本では、「震災後、余暇活動が増えた」という回答も、その他の道府県に比べて多く、復興の過程で余暇活動も一定の役割を果たしていたのではないかと考えられる。

※余暇に関する価値観が多様化しており、「安全・安心」「絆と繋がり」「社会貢献」「健康」「自分らしさ」の5つの志向をキーワードとして、余暇活動の現状と今後のあり方を考察した。(白書第3章)

日本人の余暇活動の現状 ～「国内観光旅行」「マラソン」が好調～<別添資料 p. 2>

2年連続で参加人口の1位だった「ドライブ」にかわって「国内観光旅行（避暑、避寒、温泉など）」(5,580万人)、「外食（日常的なものは除く）」(5,370万人)が1位、2位となった。全体的には縮小傾向にあったが、「ジョギング、マラソン」(2,590万人)は参加人口を増やした。旅行の参加人口も堅調で「国内観光旅行」のほか「帰省旅行」も順位を上げた。

余暇関連産業・市場の動向 ～市場規模は前年比4.5%減～ <⇒別添資料 p. 3>

2011年の余暇市場規模は、64兆9,410億円となり、1989年の水準を下回った。

【スポーツ部門】ランニング関連用品・スポーツ自転車・アウトドア用品が引き続き堅調。

【趣味・創作部門】ミラーレス一眼カメラが好調だが、テレビは地デジ特需の反動減が大。

【娯楽部門】宝くじで2008年以来の1兆円超え。ゲームセンター施設数の減少続く。

【観光・行楽部門】大手テーマパークやインドア施設が人気。海外旅行は横這いを維持。

<調査仕様> ■調査方法 : インターネット調査 ■調査対象 : 全国15歳～79歳男女
■有効回収数 : 3,294 ■調査時期 : 2012年1月

【お問合せ先】 公益財団法人日本生産性本部 余暇創研（担当）志村、松本
Tel : 03-3409-1125 / Fax : 03-3409-1187 / Mail : yoka@jpc-net.jp

以上

要約

1 2011年の余暇活動

「国内観光旅行」首位、「マラソン」が好調

(本文第1章参照)

2011年は、3月11日に起きた東日本大震災および原発事故が余暇活動へも大きな影響を与えた。下半期以降は、余暇需要の復活も見られたが、経済活動の停滞、人口減少や高齢化、円高などの構造的な要因もあり、前年に引き続き余暇活動は全体的に縮小した。参加人口でみると、全91種目のうち78種目で前年を下回った。

2年連続で参加人口の1位だった「ドライブ」は、高速道路料金の休日1000円や無料化実験の終了に伴って、900万人余り参加人口が減少し、3位に低下した。かわって「国内観光旅行(避暑、避寒、温泉など)」、「外食(日常的なものは除く)」が1位、2位となった。

全体的な縮小傾向にあって参加人口を増やしたのは「体操(器具を使わないもの)」(2,710万人、前年比50万人増)、「ジョギング、マラソン」(2,590万人、前年比20万人増)で、順位も前年の圏外からそれぞれ15位、17位に躍進した。

節電対応のため夏期休業期間を伸ばす企業が増えたが、それを背景に、旅行の参加人口が堅調だった。前述の「国内観光旅行」のほか「帰省旅行」も圏外から19位に順位を上げた。

巻頭図表1 余暇活動の参加人口上位20位(2010年、2011年)

2010年			2011年		
順位	余暇活動種目	万人	順位	余暇活動種目	万人
1	ドライブ	6,290	1	国内観光旅行(避暑、避寒、温泉など)	5,580
2	国内観光旅行(避暑、避寒、温泉など)	6,150	2	外食(日常的なものは除く)	5,370
3	外食(日常的なものを除く)	6,040	3	ドライブ	5,360
4	映画(テレビは除く)	5,150	4	映画(テレビは除く)	4,160
5	動物園、植物園、水族館、博物館	4,800	5	音楽鑑賞(CD、レコード、テープ、FMなど)	4,110
6	音楽鑑賞(CD、レコード、テープ、FMなど)	4,700	6	ビデオの鑑賞(レンタルを含む)	3,970
7	カラオケ	4,680	7	カラオケ	3,910
8	ビデオの鑑賞(レンタルを含む)	4,550	8	宝くじ	3,840
9	宝くじ	4,440	9	動物園、植物園、水族館、博物館	3,720
10	テレビゲーム(家庭での)	4,290	10	園芸、庭いじり	3,380
11	トランプ、オセロ、カルタ、花札など	3,960	11	テレビゲーム(家庭での)	3,340
12	園芸、庭いじり	3,720	12	トランプ、オセロ、カルタ、花札など	3,090
13	学習、調べもの	3,450	13	音楽会、コンサートなど	2,840
14	ピクニック、ハイキング、野外散歩	3,380	14	学習、調べもの	2,720
15	音楽会、コンサートなど	3,270	15	体操(器具を使わないもの)	2,710
16	バー、スナック、パブ、飲み屋	3,160	16	バー、スナック、パブ、飲み屋	2,640
17	ゲームセンター、ゲームコーナー	3,000	17	ジョギング、マラソン	2,590
18	写真の制作	2,950	18	写真の制作	2,430
19	催し物、博覧会	2,840	19	帰省旅行	2,380
20	遊園地	2,770	20	ピクニック、ハイキング、野外散歩	2,330

(注) パソコン(ゲーム、趣味、通信など)の参加人口は2011年で7,150万人だが、インターネット調査であることを考慮して上位20位から除外した。

2 2011年の余暇市場動向

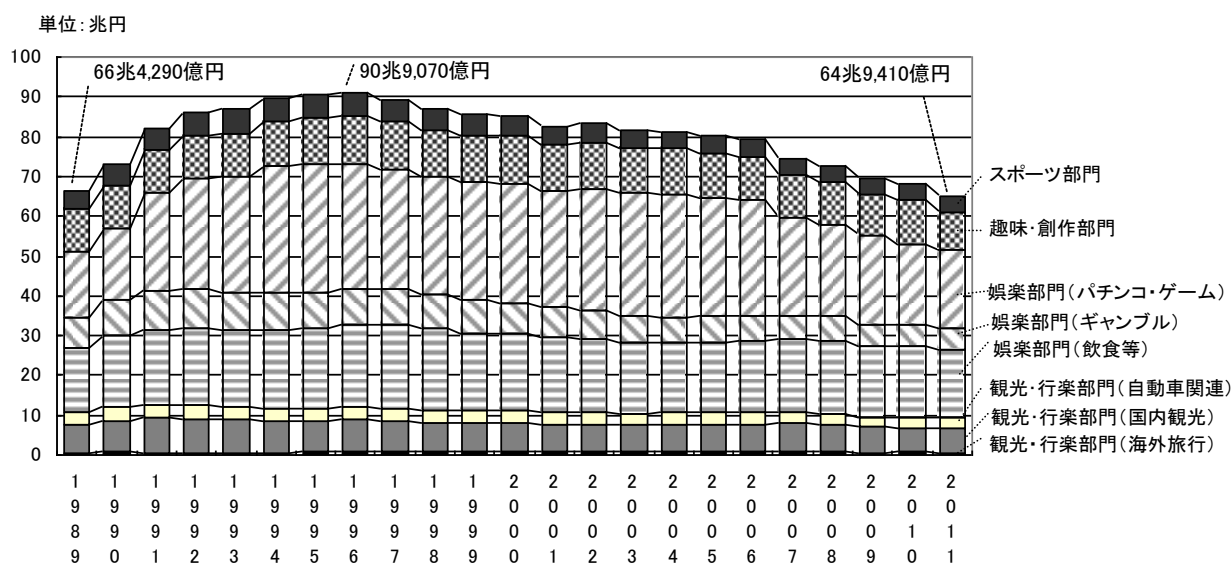
昭和の水準まで縮小、インドア施設が人気に

(本文第2章参照)

2011年の余暇市場は64兆9,410億円となり、前年比4.5%減少した。市場規模の大きいパチンコ・パチスロを除くと5.3%減少しており、ほとんどの分野が落ち込んでいる。東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の影響で、年前半は余暇に対する自粛ムードが広がった。年後半は回復したが、落ち込みをカバーするまでには至らなかった。市場規模は、長期的にみるとレジャー白書で推計を開始して以来拡大を続けていたが、1996年にピークとなった以降は下り坂となり、2011年はついに1989年(平成元年)の水準を下回った。

スポーツ部門(前年比3.1%減)では、アウトドア用品で、ワンランク上の用品への買い換えが進んでいる。ランニング用品は、最盛期ほどではないが、ブームは続いている。スポーツ自転車も伸び続けている。前年1兆円を割ったゴルフ場はさらに減少した。**趣味・創作部門**(前年比13.8%減)では、ミラーレス一眼(ノンフレックス)カメラが伸びているが、タイ洪水で供給不足となった。地上デジタルテレビ駆け込み特需の反動減は大きかった。CDの落ち込みが続き、有料音楽配信も大きく落ちた。**娯楽部門**(前年比2.6%減)では、ゲームセンター大手が大幅な店舗整理を進め、施設数の大幅減が続いている。パチンコ・パチスロの貸玉料・貸メダル料は8年連続、公営競技は15年連続で減少し回復が見えない。宝くじは、2008年以來の1兆円超えとなった。**観光・行楽部門**(前年比3.2%減)では、遊園地・テーマパークの大手は堅調。水族館、民間ミュージアム、プラネタリウムなど、インドア施設が人気だった。旅行業は、国内は落ちたが、海外は横ばいを維持。ホテルや旅館の売上げは微減であった。

巻頭図表 2 余暇市場の推移



3 震災後の余暇の増減

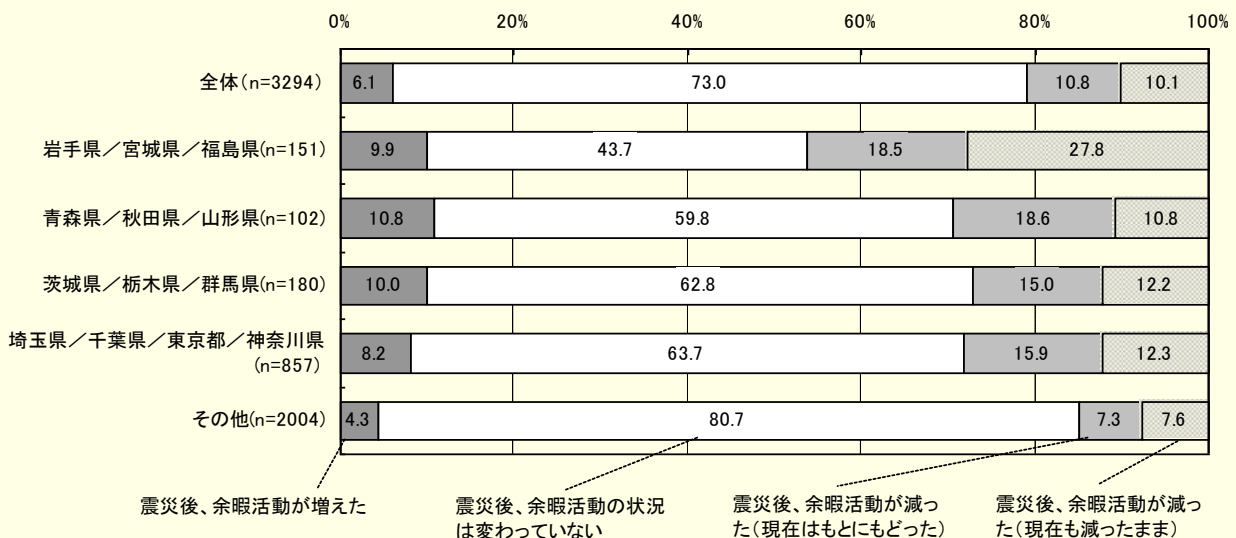
東日本で問われる余暇の役割

(本文第3章参照)

歴史的な巨大被害をもたらした東日本大震災と原発事故から1年半余りが経過した。観光やレジャーの多くも震災によって影響を受けた。直接的な被害はもちろん、活動の自粛、計画停電や節電による営業の短縮、風評被害などに見舞われてきた。その後、時間の経過とともに、レジャー活動は息を吹き返したかのように見えるが、人々のレジャーに対する意識は根底的な部分で変化してはいないだろうか。今回のレジャー白書では、東日本大震災がレジャーに対する人々の価値観にどのような変化をもたらしたのかを解明しようと試みた。

東日本で、とくに被害の大きかった「岩手県・宮城県・福島県」および、「青森県・秋田県・山形県」、北関東（「茨城県・栃木県・群馬県」）、南関東（「埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県」）に分けて震災後の余暇活動の増減に対する意識をみると、東日本では、どの地域も「震災後、余暇活動が減った」が、その他の道府県の2倍近い割合にのぼった。「余暇活動が減った」のうち半分以上は「現在はもとにもどった」としているが、「岩手県・宮城県・福島県」では、「現在も減ったまま」が27.8%となっている。一方、東日本では、「震災後、余暇活動が増えた」という回答の割合も、その他の道府県の2倍近くあった。震災によって余暇活動は影響を受けたものの、復興に向けたさまざまな取り組みのなかで、余暇活動も一定の役割を果たしていたのではないかと考えられる。実際、「岩手県・宮城県・福島県」では、「パソコン（ゲーム、趣味、通信など）」「外食（日常的なものを除く）」「体操（器具を使わないもの）」「ジョギング、マラソン」などの種目で、2011年のほうが前年より参加率が伸びている。

巻頭図表 3 震災後の余暇の増減



4 余暇の目的の推移

余暇の目的は多様化・複合化

(本文第3章参照)

「余暇活動にどのような楽しみや目的を求めていますか (現在の目的)」「今後10年間で、余暇活動にどのような楽しみや目的を求めていきたいですか (今後の目的)」という質問をしたところ、「現在の目的」で多かったのは、「心の安らぎ」「健康や体力の向上」「家族や友人・知人との交流」「身体を休める」「知識や教養を高める」などとなっている。「身体を休める」は、男女とも働き盛りの30～40代が多く、「心の安らぎ」も中高年ほど多くなる傾向があった。

この質問は2年前と15年前 (現在の目的のみ) にも調査している。「現在の目的」で2年前に比べて増えた回答は「社会や人のために役立つ」「好奇心を満たす」「技術や腕前の向上」「推理、想像を楽しむ」「創造力の発揮」などである。「社会や人のために役立つ」は、とくに男女とも60代が多く、「好奇心を満たす」は10～20代が多い。その一方で、「日常生活の解放感」「身体を休める」「ぜいたくな気分ひたる」「心の安らぎ」「自然に触れる」などとした回答者の割合は低下した。

15年前と2年前からの推移をみると、余暇の目的が多様化・複合化していることがわかる。

今回の白書では、「安全・安心志向」「絆と繋がり志向」「社会貢献志向」「健康志向」「自分らしさ志向」の5つの傾向を抽出し、意識面と行動面の特徴や、今後のレジャー社会への課題を明らかにした。

巻頭図表4 余暇活動の目的の推移

余暇活動の目的	1997年	2010年(n=3110)			2012年(n=3294)		
	現在の目的	現在の目的	今後の目的	今後-現在	現在の目的	今後の目的	今後-現在
心の安らぎを得ること	59.1	66.9	67.0	0.1	63.5	61.9	▲ 1.6
健康や体力の向上をめざすこと	40.2	48.7	59.9	11.2	53.4	62.0	8.6
家族との交流を楽しむこと	42.8	45.2	50.4	5.2	49.5	53.0	3.5
友人や知人との交流を楽しむこと	57.8	46.2	51.2	5.0	48.3	53.1	4.8
身体を休めること	48.5	52.3	50.8	▲ 1.5	48.1	44.8	▲ 3.3
知識や教養を高めること	25.2	36.7	46.1	9.4	38.9	42.7	3.8
好奇心を満たすこと	11.3	27.6	30.4	2.8	35.8	34.6	▲ 1.2
日常生活の解放感を味わうこと	35.7	38.9	39.2	0.3	34.6	33.2	▲ 1.4
自然に触れること	35.4	35.9	44.9	9.0	33.2	40.4	7.2
自分で作れる喜びを満たすこと	19.8	24.9	28.7	3.8	30.9	31.8	0.9
芸術や美的な関心を満たすこと	16.5	24.5	30.8	6.3	24.4	28.4	4.0
技術や腕前の向上をめざすこと	8.9	14.2	18.1	3.9	21.7	22.2	0.5
仕事や学習に役立つこと	8.7	18.9	20.7	1.8	21.1	21.7	0.6
実益(収入)に結びつくこと	6.0	15.1	25.6	10.5	20.7	26.8	6.1
社会や人のために役立つこと	9.9	11.9	25.7	13.8	20.5	33.2	12.7
創造力を発揮すること	6.0	12.4	16.8	4.4	18.5	21.4	2.9
仕事や学習への新しい意欲を得ること	9.0	14.2	18.9	4.7	17.8	21.1	3.3
ぜいたくな気分ひたること	9.1	21.4	32.5	11.1	17.5	23.7	6.2
推理、想像を楽しむこと	3.8	8.3	8.8	0.5	15.0	14.5	▲ 0.5
賭けや偶然を楽しむこと	5.6	7.4	6.8	▲ 0.6	9.8	8.3	▲ 1.5
腕を競い競争すること	4.2	3.6	3.8	0.2	6.6	5.7	▲ 0.9
スリルを味わうこと	3.7	4.6	5.0	0.4	6.0	5.3	▲ 0.7

(注) 1997年、2010年、2012年は調査年を示す。